

## 漱石文学論からする「彼岸過迄」の分析・構成

漱石は『文学論』第一編で四分類を確立した。その後の補足的な論文でこの四分類をさらに深化させ、またそこに「外向的・内向的」観点も導入した。そしてこの流れの延長上に、今問題にしている『彼岸過迄』の須永の「告白」があるのである。漱石はここで、今まで展開してきたこの流れをさらに一層押し進めようとしている。今まではこれを理論的に展開してきたが、今度はこれを文学的に、生きた人間のなまなましいドラマとして形象化し、さらに一層この問題を追及してゆくのであります。

具体的に須永の「告白」に移ろう。

この告白は、内向的性格の人間の自己告白とでも言えるものであるとは前に述べた。須永は敬太郎の請いに応じて彼と千代子の関係について語っているのだが、それは同時に彼自身の内向的性格を分析してゆくものともなっている。漱石は、須永という生きた実例を用いて内向的性格を分析してゆき（それと同時に外向的性格も分析されてゆく）、それが持つ全体的意味を浮き彫りにしてゆくのである。

須永は無口で物静かな青年である。外に出て活発に活動することを好まず、家の中に静かに引きこもっていることを好むタイプの人間である。彼は「知らない人を怖がる性分なので」、人づき合いということもあまりしたがらない。外見的には、「弱々しい体格」と「蒼白い顔色」をしている、神経質な感じのする若者である。

彼は大学を優秀な成績で卒業したのだが、まだ職に就こうとはしていない。死んだ父が財産を残してくれたおかげで生活には困らないから、それをいいことに彼は家の中に引きこもってばかりいる。彼は、実社会に出て働いて社会的に成功することに何の関心も持っていない。そんなことをして「朝から晩まで気骨を折って、世の中に持て囃された所で、何処がどうしたんだ」というふうに思っている。そんなことが彼の性に合わないことを、彼自身よく自覚している。

「...僕は時めくために生れた男ではないと思う。法律などを修めないで、植物学か天文学でも遣ったらまだ性に合った仕事が天から授かるかも知れないと思う。僕は世間に対しては甚だ気の弱い癖に、自分に対しては大変辛抱の好い男だからそう思うのである」

彼はこの告白において、自分自身の性格について様々に述べている。自分自身のことを「羞恥家（はにかみや）」と呼んだり、「煮え切らない」「引っ込み思案」の性格だと言ったり、さらには「卑怯」「愚図」、「強情」「わがまま」と罵声に近い言葉を自分自身に投げつけている。彼は自分自身の性格を屈折している嫌な性格と見なして、この性格のために苦しい制約を受けていると感じているのである。たしかに彼の性格にはかなり偏屈で屈折したところがある。人が右へ行けと言えば左に行き、左に行けと言えば自分がもともと左に行きたくても敢えて右に行くといったタイプである。こんな屈折した性格は彼自身よく承知していて、「僕は神経の鋭どく働く性質だから、物を誇大に考え過したり、要らぬひがみを起して見たりする弊がよくある」と述べている。

彼のこの屈折した変人ぶりは、鎌倉での避暑の際にも如実に現れている。彼はわざわざ鎌倉まで出かけたのに、田口の別荘に着くとすぐ、母親を残してその日の内に帰ると言い出したのである。理由は、その家で高木という見知らぬ青年を見かけて、なんとなく嫌に感じたからという、ただそれだけの理由であった。千代子たちはやっきになって引き留めたが、彼の変人ぶりは万事このような調子だったのである。高木と初めて対面したときにも、彼は屈折した心理状態になる。

「僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかった。話をする所を聞いて、すぐ及ばないと思った。それだけでもこの場合に僕を不愉快にするには充分だったかも知れない。けれども段々彼を観察しているうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せ付ける様な態度で、誇り顔に発揮するのではなかろうかという疑いが起った。その時僕は急に彼を憎み出した。そうして僕の口を利くべき機会が廻って来てもわざと沈黙を守った」

彼はこのような自分の性格に—自分自身でもどうしようも出来ない陰気で屈折した性格に、しばしば深い自己嫌悪に捕われてしまう。彼は、「自分は人の気を悪くする為に、人の中へ出る、不愉快な動物である」とも思っている。また、「自分は何故こう人に嫌われるんだろう」と絶望的な思いに駆られて打ち明けられることもあった。彼には主観的にそう思えるのであり（後述するように客観的には必ずしもそうではない。むしろ畏敬されていると言える）、彼は自分自身の性格に深いコンプレックスを持ってもいるのである。

しかしこの須永の偏屈さや強情さは、ある意味で彼の誠実さの現れでもあるのだ。彼は外界の世界に対しては、手に負えないほど強情でわがままかも知れない。だがその分自分自身の内面世界に対してはきわめて誠実なのである。彼は、自分の内的確信を経たものでなければ、受け入れることのできない人間な

のである。たとえどんなに立派なものでも、外的な権威や外的なしきたりに無条件に順応することなど彼の性格が許さないのだ。たとえ周囲から「わがまま」「強情」と非難されても、彼は言うことを聞かず、ひたすら自分の内なる世界を守り、その基準にのみ則ろうとする。彼が「知らない人を怖がり」「よく人を疑う」のは、なによりもそのような外からの闖入者によって自分の内面世界がかき乱されることを怖れるからである。彼は人の言うことを聞かず、あまのじゃく的に反撥を示すが、それもすべて自分の内面世界を守りたいがため、その世界の自律性を確保したいがためなのである。

しかし須永は同時に奇妙に従順な一面もある。彼は内面世界への干渉に対しては断固とした拒絶を示すが、それ以外のこと、とりわけ外的世界のことは無関心に放置してしまい、その世界が何をしようと好きにさせ、また彼自身にたいしてどんな強制を押し付けてきても（それが彼の内面世界に干渉するものでなければ）唯々諾々と従うのである。彼は外的世界の事物や出来事にそれほど執着しない。外向的人間にとっては最大の関心事であることが、須永にとっては基本的にどうでもいいことであり、それを獲得しようとする情熱を傾けることもない（彼は千代子の獲得にも情熱を燃やすことがなく、すぐに諦めてしまう）。もちろんこんな彼は、外的な世界のいい餌食にされ、様々に不利益をこうむることになるだろう。無関心であることにつけ込まれていいように扱われ、一方的に利用され、出し抜かれ、こき使われて、そして彼自身には何物も得られない、という状態になってしまう。しかし彼はそんな境遇に置かれても、やはり外的世界を放置したままである。彼にとって最も大切な内面世界さえ守れたらそれでいいのである。ユングがこのタイプの特徴的な運命として述べているような、精神的には「王者」となるが外的世界に対しては「奴隸」となるという皮肉な状態が、この場合にも当てはまるのである。

このような須永は、内向的であると同時に思考型の性格に属しているといえる。彼は自分でも嫌になるほど「頭の働く」人物である。あるとき須永は、自分の前に座って給仕している女中の素朴そうな人柄を見てこう思う。

「...自分の腹は何故こうしつこい油絵の様に複雑なのだろうと呆れた...。白状すると僕は高等教育を受けた証拠として、今日まで自分の頭が他より複雑に働らくのを自慢にしていた。ところが何時かその働らきに疲れていた。何の因果でこうまで事を細かに刻まなければ生きて行かれないのかと考えて情けなかった。僕は茶碗を膳の上に置きながら、作の顔を見て尊い感じを起こした」

須永は学問好きな男で、難しい本を読破しては喜びを覚えるような人物である。彼の叔父の松本—松本自身も立派な知識人であり、須永から親戚の中で一番

尊敬されていた—でさえ、須永のことを、「僕よりも優れた頭の所有者である」と述べて、須永の前に出ると「彼から馬鹿にされないように」用心するぐらいであった。

この松本が須永の性格を概括している箇所がある。それは「須永の話」のすぐあとに続く「松本の話」という箇所である。これは物語の最後の部分にあり、老成した知識人の松本が大所高所から物語り全体を総括するような話となっている。（『彼岸過迄』は様々な「話」が合体して出来上がっている小説である。敬太郎の「話」、須永の「話」、千代子の「話」、松本の「話」、さらには森本や田口の「話」など、性格や年齢、境遇や性別が異なる実に様々な人間の口から出た「話」が、それぞれがそれぞれなりに見た世界を披露し合いながら、全体として一つにまとめられているという構成をとっているのである）

「市蔵（須永の名前）という男は世の中と接触する度に内へとぐるを捲き込む性質である。だから一つの刺戟を受けると、その刺戟がそれからそれへと廻転して、段々深く細かく心の奥に喰い込んで行く。そうして何処まで喰い込んで行っても際限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。仕舞にはどうかしてこの内面の活動から逃れたいと祈る位に気を悩ますのだけれども、自分の力では如何ともすべからざる呪いの如くに引っ張られて行く。そうして何時かこの努力の為に斃れなければならない。たった一人で斃れなければならないという怖れを抱くようになる。そうして気狂の様に疲れる。これが市蔵の命根に横たわる一大不幸である」

この須永の宿命ともいえる精神活動は、一方では彼に深い成長をもたらしながらも、他方彼を苦しめてやまない業病ともなっている。「僕の頭（ヘッド）は僕の胸（ハート）を抑える為に出来ていた」と述懐しているように、彼の本能的生活を不自然に歪めてしまうほどであった。彼がこの言葉を述べたのは、彼が鎌倉からたった一人帰って来たとき、かの地で彼と千代子と高木の間で三角関係的な感情ドラマが起きそうな予感をした須永が、アッサリと逃げ帰って来たときのことであった。

「僕は強い刺戟に充ちた小説を読むに堪えない程弱い男である。強い刺戟に充ちた小説を実行する事は猶更出来ない男である。僕は自分の気分が小説になり掛けた刹那に驚ろいて、東京へ引き返したのである。だから汽車の中の僕は、半分は優者で半分は劣者であった」

このように「頭」と「胸」の争いが起きたとき、彼は常に「頭の命令に屈従

して」しまうのである。

漱石は須永の告白話の中で、内向的性格の須永だけでなく、もう一方の側にある外向的性格の人物も描き出している。たとえば鎌倉の話に出てくる高木である。彼は須永と対称的に典型的な外向的タイプである。明るくてそつのない社交的な青年として描写されている。

「二人の容貌が既に意地の好くない対照を与えた。然し様子とか応対振りとかになると僕は更に甚だしい相違を自覚しない訳に行かなかった。僕の前にいるものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親しみの深い血属ばかりであるのに、それ等に取り捲かされている僕が、この高木に比べると、かえって何処からか客にでも来たように見えた位、彼は自由に遠慮なく、しかも或程度の品格を落す危険なしに己を取扱う術を心得ていたのである。知らない人を怖れる僕に云わせると、この男は生まれるや否や交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人と成ったのだと評したかった。彼は十分と経たないうちに、凡ての会話を僕の手から奪った。そうしてそれを悉く一身に集めてしまった。その代わり僕を除け者にしないための注意を払って、時々僕に一句か二句の言葉を与えた。それが又生憎僕には興味の乗らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にする事も出来ず、高木一人を相手にする訳にも行かなかった。彼は田口の叔母を親しげに御母さん御母さんと呼んだ。千代子に対しては、僕と同じ様に、千代ちゃんという幼馴染みに用いる名を、自然に命ぜられたかの如く使った。そうして僕に、先程御着きになった時は、丁度千代ちゃんと貴方の御噂をしていた所でしたと云った」

しかし一方彼は、外向的な人間によくありがちな欠点—内面世界を無関心に放置してしまうという欠点を持っていて、それが彼を浅薄な人間にしており、千代子から「上はハイカラでも下は蛮殻（バンカラ）なんだから」と揶揄されてしまう。

しかし高木よりもはるかに重要な外向的人物が登場してくるのである。それはこの物語りのヒロイン千代子に他ならない。

千代子と須永はいとこ同士の関係にある。二人は幼い頃から兄妹のように親しくして成長してきた。そして二人にはさらに深い関係があった。二人はいいなずけの関係にあったのである。千代子が生まれたとき、須永の母が、「どう思ったものか、大きくなったらこの子を市蔵の嫁に呉れまいかと田口夫婦に頼ん

だのだそうである。母の語る所によると、彼等はその折、快よく母の頼みを承諾したのだと云う」。しかしそれは決して正式のものではなく、遠い昔の口約束に過ぎないもので、果たして二人が実際に結婚するかどうかは分らない。須永自身このことを聞かされたのは大学二年になってからだった。もうそろそろ結婚適齢期になってきた須永に、母は結婚相手として千代子のことを仄めかしたのだ。それ以来須永は千代子のことを今までのいとことは別の意味で意識するようになった。彼にとってこの結婚話は、かれを不安にさせる「危機」として感じられ、彼はこれから逃れようと苦心することになる。千代子も自分が須永のいいなずけであることを知っていたらしい。そして彼女は、須永とは反対に、彼との結婚を望んでいたのだ。彼女は幼い頃須永が描いてくれた絵を今でも大切に持って、「あたし御嫁に行く時も持ってく積りよ」と須永に言う。あるとき田口家のつどいで須永の結婚相手のことが話題になったとき、千代子はその場にいた須永に「あたし行って上げましょうか」と冗談めかして言ったこともある。年頃の彼女には様々な縁談話も持ちかけられたが、彼女はいつも断ってしまう。そして相変わらず須永の家をしげしげと訪れては須永に会いに来るのである。

千代子は須永と対称的な外向的タイプに分類できる。彼女は明るく活発な女性であり、社交的で開放的で、ハキハキとしたタイプの人間である。彼女はかにも外向的タイプらしく、他人に対して「大胆に率直に」振る舞い、外的世界に積極的に働きかけてゆく。うじうじと屈折した須永とは好対照な存在であり、須永はしばしばこのような千代子の性格を羨ましく思う。

「僕は平生から彼女が僕に対して振舞う如く大胆に率直に（或時は善意ではあるが）威圧的に、他人に向って振舞う事が出来たなら、僕の様な他に欠点の多いものでも、さぞ愉快に世の中を渡って行かれるだろうと想像して、大いにこの小さな暴君を羨ましがっていた」

千代子の性格をさらに詳しく分析するなら、彼女は外向タイプの中でも「感情型」に属していると言える。須永は千代子の「感情」を次のように述べている。

「千代子の言語なり挙動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野な所を内に蔵しているからではなくって、余り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げ掛けるからだ僕に固く信じて疑わないのである。彼女の有っている善悪是非の分別は殆んど学問や経験と独立している。ただ直覚的に相手を目当てに燃え出すだけである。それだから相手は時によると稲妻に打た

れた様な思いがする。当りの強く烈しく来るのは、彼女の胸から純粋な塊まりが一度に多量に飛んで出るという意味で、刺だの毒だの腐蝕剤だのを吹き掛けたり、浴びせ掛けたりするのはまるで訳が違う。その証拠には、たとえどれ程烈しく怒られても、僕は彼女から清いもので自分の腸を洗われた様な気持ちした場合が今までに何遍もあった。気高いものに出会ったという感じさえ稀には起こした位である。僕は天下の前にただ一人立って、彼女はあらゆる女のうちで尤も女らしい女だと弁護したい位に思っている」

この二人の性格—須永は「内向的思考型」であり、千代子は「外向的感情型」である—は、ユングのタイプ論から見ればまったく正反対のタイプの一つである。「外向」「内向」が正反対である上に、「感情」「思考」も正反対に位置する型で、この二つのタイプは二重に正反対であり、まったく異なる性格タイプと言ってもいいのである。彼らの性格はまるで異なり、二人はそれぞれ別々の異なる世界に住んでいるのである。須永はこの二つの異なる世界の相違を、次のような言葉で表現している。

「一口に云うと、千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。そうして僕は恐ろしい事だけ知った男なのである」「...恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思い切った事の出来ずに愚図愚図しているのは、何より先に結果を考えて取越し苦勞をするからである。千代子が風の如く自由に振舞うのは、先の見えない程、強い感情が一度に胸に湧き出るからである。彼女は僕の知っている人間のうちで、最も恐れない一人である。だから恐れる僕を軽蔑するのである。僕は又感情という自分の重みで蹴つまづき、そんな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐れむのである。否時によると彼女の為に戦慄するのである」

ユングは、この須永タイプの人間によく見られる「女性に対する恐怖」を述べているが、それによるとこれは彼自身の性格を守るための防御的障壁なのだという。この種のタイプの人間にとって「感情」とは、自分の「思考」を脅かす「劣等機能」なのであり、この「感情」の化身ともいべき女性は、彼自身の全性格・全人格を覆しかねないほどの恐るべき脅威なのである。

この故に須永には、彼と千代子の夫婦生活を想像することができない。二人は、「唯釣り合わないばかりでなく、夫婦となれば正に逆に出来上がるより外に仕方がない」ように思えるのである。

「僕は常に考えている。「純粋な感情程美しいものはない。美しいもの程強い

ものはない」と。強いものが恐れないのは当たり前である。僕がもし千代子を妻にするとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪えられないだろう。その光は必ずしも怒りを示すとは限らない。情の光でも、愛の光でも、若しくは渴仰の光でも同じ事である。僕はきっとその光の為に射すくめられるに極っている。それと同程度或いはより以上の輝くものを、返礼として彼女に与えるには、感情家として僕が余りに貧弱だからである。僕は芳烈な一樽の清酒を貰っても、それを味わい尽くす資格を持たない下戸として、今日まで世間から教育されて来たのである。

千代子が僕の所へ来れば必ず残酷な失望を経験しなければならない。彼女は美しい天賦の感情を、有るに任せて惜気もなく夫の上に注ぎ込む代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上的の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から予期するに違いない。年の行かない、学問の乏しい、見識の狭い点から見ると気の毒と評して然るべき彼女は、頭と腕を挙げて実世間に打ち込んで、肉眼で指す事の出来る権力か財力を攫まなくては男子でないと考えている。単純な彼女は、たとい僕の所へ嫁に来て、矢張りそう云う働き振りを僕から要求し、又要求さえすれば僕に出来るものとのみ思い詰めている。二人の間に横たわる根本的の不幸は此所に存在すると云っても差支えないのである。僕は今云った通り、妻としての彼女の美しい感情を、そう多量に受け入れる事の出来ない至って燻ぶった性質なのだが、よし焼石に水をそそいだ時の様に、それを悉く吸い込んだ所で、彼女の望み通りに利用する訳にはとても行かない。もし純粋な彼女の影響が僕の何処かに表われるとすれば、それはいくら説明しても彼女には全く分らない所に、思いも寄らぬ形となって発現するだけである。万一彼女の眼に留まっても、彼女はそれをコスメチックで塗り堅めた僕の頭や羽二重の足袋で包んだ僕の足よりも有り難がらないだろう。要するに彼女から云えば、美しいものを僕の上に永久浪費して、次第々に結婚の不幸を嘆くに過ぎないのである」

松本もまた須永と千代子の二人の関係を次のように見ている。

「...夫婦になろうが、友達として暮らそうが、あの衝突だけは免れる事の出来ない、まあ二人の持つて生まれた、因果と見るより外に仕方がなかろう。ところが不幸にも二人は或る意味で密接に引き付けられている。しかもその引き付けられ方が傍のものにどうする権威もない宿命の力で支配されているんだから恐ろしい。取り済ました警句を用いると、彼等は離れる為に合い、合う為に離れると云った風の気の毒な一対を形づくっている。こう云って君に解るかどうか知らないが、彼等が夫婦になると、不幸を醸す目的で夫婦になったと同様

の結果に陥いるし、又夫婦にならないと不幸を続ける精神で夫婦にならないのと択ぶ所のない不満足を感じるのである。だから二人の運命はただ成り行きに任せて、自然の手で直接に発展させて貰うのが一番上策だと思う」

須永と千代子は、このように全く異なる世界に住んでいるのである。この正反対の性格の二人を無理にまとめようとしたら、二人の世界をどちらも滅ぼしかねない結果が待っているのだ。須永が鎌倉からアッサリ立ち去ったのも、根本的にはこういう思いがあったからであった。

しかし、鎌倉から神田の家に帰ってゆっくりしていた須永のもとに思いがけない事が起る。千代子が追いかけて来たのだ。彼女は須永の母に付き添うという名目で、須永の後を追いかけて来たのである。

動揺する須永を尻目に、彼女はいつも通りの「明っ放しな」態度で一夜を過す。翌日須永の母は髪結いを呼んで髪を結わした。千代子もその時自分の髪を島田に結ってもらい須永に見せた。彼女は今日これから鎌倉に帰るという。そのとき須永は何度も口にしかけて言えなかったことを言う。「高木」はどうしたか聞いたのである。それを聞いたとき千代子の様子は一変した。彼女は須永を「あなたは卑怯だ」と激しくなじり始めたのである。

「千代ちゃんの様な活発な人から見たら、僕みたいに引込思案なものは無論卑怯なんだろう。僕は思った事をすぐ口へ出したり、又そのまま所作にあらわしたりする勇気のない、極めて因循な男なんだから。その点で卑怯だと云うなら云われても仕方がないが...」

「そんな事を誰が卑怯だと云うもんですか」

「しかし軽蔑はしているだろう。僕はちゃんと知ってる」

「あなたこそあたしを学問のない、理窟の解らない、取るに足らない女だと思って、腹の中で馬鹿にし切ってるんです」

「それは御前が僕を愚図と見縊ってるのと同じ事だよ」

...「あなたはあたしを御転婆の馬鹿だと思って始終冷笑しているんです。あなたはあたしを...愛していないんです。つまりあなたはあたしと結婚なさる気が...」

「そりゃ千代ちゃんの方だって...」

「まあ御聞きなさい。そんな事は御互いだと云うんでしょう。そんならそれでよう御座んす。何も貰って下さいとは云やしません。ただ何故愛してもいず、細君にもしようと思っていないあたしに対して...」

彼女は此所へ来て急に口ごもった。不敏な僕はその後へ何が出て来るのか、まだ覚れなかった。「御前に対して」と半ば彼女を促がす様に問を掛けた。彼女

は突然物を衝き破った風に、「何故嫉妬なさるんです」と云い切って、前よりは劇しく泣き出した」

須永の「告白」はこの場面で終わっている。須永と千代子の二人の関係は、最後まで平行線をたどったままなのであった。(千代子の須永に対する「馬鹿にしている」うんぬんの批難の言葉は、必ずしも真実を突いたものではなく、彼女の主観的な思い込みであるといっている。外向的な人間が内向的人間にコンプレックスを抱くとき、しばしばこのような思い込みをするのである)

須永の告白話は、須永と千代子という正反対の性格の持ち主を描写し、その二つの「異なる世界」の接近、対立、葛藤の様を描き出しているものといえる。お互いに理解し難い「異なる世界」というものが存在するという事、それをこの告白話は教えようとしている。

この「異なる世界」の存在を教えること—これは実はあのユングや漱石の分類体系の中心的な意義でもあるのだ。ユングや漱石の分類体系は、無限に豊かな人間群像をその中に内蔵している体系であることは前に述べた。しかしその体系の意義はそれだけにとどまることはなく、さらに第二の意義としてこの「異なる世界」の存在を教えるということがあるのだ。

人間は通常この八分類のどれかに属していて、その中でのみ暮らしている。彼は彼の性格に由来する「色メガネ」をかけて世界を見ているのであり、彼はそれ以外の世界の見方を知らず、彼にとって空気のように当たり前な自分の世界こそが世界のすべてのように思えてしまう。たまに自分とは違う見方をしている人間がいるのに気づくと、彼はその人間を理解不能な「おかしい」人間と決めつけ、馬鹿にしたり嘲弄したり、拒否したり迫害したりしてしまう。他の「異なる世界」の住人を理解することは極めて難しい行為であり、「異なる世界」が存在するという事実を始めからしっかりと知っていなければ、その世界を理解することなどなお一層困難になり、しばしば全く不可能になってしまうのだ。

ユングや漱石の分類体系は、まさにこの自分とは「異なる世界」の存在を、体系的にまざまざと教えてくれるものなのである。ある人間が八分類の一つに属するとすると、その周囲には少なくとも七つの「異なる世界」が存在することになる(この七つはあくまで「少なくとも」であり、どの分類でもいくらかでも細分化・専門化できるから、原理的には無数の世界が広がっていることになる)。この八つの世界は相互に異なっているが、どれかがどれかに優越するとい

うことはなく、すべて全く同等の価値を持って存在している。自分の属している世界がどんなに自分には絶対的に見えても、それは多様な「異なる世界」の内の相対的な一つに過ぎないのだ。それぞれの世界は、異なる視点で「異なる世界」を築き上げながらも、同等の価値を持って存在している。すべての世界にはそれぞれ独自の深い価値があり、どれも人間の無限に豊かな可能性の現れなのだ。...ユングや漱石の体系は、このことを教える体系なのである。

もし「異なる世界」の存在を知らなかったらどうなるか。そのときは人間は自分の世界を（それは全体の中の部分に過ぎない）すべてと思い込むようになり、他人も当然自分と同じような世界観を持つべきだと信じ、それに反する人間を切り捨て、自分の世界を絶対視するようになるだろう。ところがこの自分の世界の絶対視とは、しばしば人間を「病的な症状」に突き落とすものなのである。たとえば外向的人間が自分の世界を絶対視して、自分の外向的性格をそれのみ一途に発展させてゆけば、その先に待っているのは外向型の宿命ともいえるべき「ロボット化」なのである。

逆に内向的人間が一途に自分の性格を追及してゆくと、その先に待っているのは主観的世界が唯我独尊している状態、つまり「狂気」なのである。

その他の型—「思考」「感情」「感覚」「直観」にも同じ事が言える（ユングはこの“自分の世界の絶対視”がもたらした精神病的症例を、それぞれのタイプごとに詳しく解説している）。いずれも自分の世界を唯我独尊的に絶対視した結果であり、しばしば見捨てられた「劣等機能」による“報復”という形に終わる悲劇なのである。

漱石もまた、この部分を絶対視することによって生じる「病的な症状」に気づいていた。彼は自分が確立した分類の一つ一つが「同等の権利と重みを以て」存在していることを繰り返し強調している。「真の理想」も「美の理想」も「善の理想」も「壮の理想」も、それぞれが同等の価値を持っているのである（「これら四種の理想は、互いに平等な権利を有して、相冒すべからざる標準であります」）。このような「異なる世界」を認識することなく、自分の世界だけを絶対視することを漱石は手厳しく批難する。まさにこの弊を冒していたのが自然主義者たちで、彼らは自分たちの「真の理想」のみを絶対視し、それ以外の世界を認めようとせず、他の理想世界を片っ端から打ち壊そうとした。まさにそれによって「病的な症状」が文学世界にもたらされてしまい、漱石はそれを防ぐために厳しく自然主義者たちを糾弾したのである。

『彼岸過迄』でもこの「病的な症状」が取り上げられている。それは須永が千代子を捨てて、鎌倉から逃げ戻ってきた直後のことだった。彼は何気なしに

外国のある小説を取り上げて読み始める。それはある男がある婦人に恋して、その婦人に相手にされずかえって自分の友人の男と結婚したのを恨みに思い、その友人をその婦人が見ている前で殺してしまうという筋であった。彼はその殺人行為をきわめて理性的に計画して実行してゆく。周囲の人々に自分を狂人と思わせるような演技まで演じてみせ、ついに友人を妻の目の前で撲殺し精神病院に送られるのである。この男は恋に破れた恨みの感情を、「驚くべき思慮と分別と推理の力とを以て」晴らしてゆき、病的な殺人行為を冒しながら最後まで自分は「正気である」と主張している。これを読んだとき須永は、この男を「正気なのだろうか、狂人なのだろうか」といぶかり、「慄然として恐れ」に襲われるのである。これはユング的に言えば「劣等機能」による“報復”の一例であり、原始的な感情が高度に発達した思考機能を乗っ取ったのである。もっと印象的な例を挙げれば、ナチスによるユダヤ人の大虐殺がある。ドイツ人は理性を高度に発達させ、ナチスにも極めて高い知性の持ち主が多かったが、まさにそれ故に彼らを「劣等機能」の“報復”が襲い、彼らは民族差別という原始的感情の虜になり、極めて理性的で科学的な判断力を駆使して、一民族の皆殺しという狂気としか思えない行為を実行していったのである。千代子を切り捨てた須永にも、自分の世界を絶対視する危険が迫っていたのであり、いつ彼もこのような「理性的な狂気」に陥るか分らないのである。

「異なる世界」の存在を知るということは、それ自体貴重な認識であるが、ここからさらに進むことができる。それは「異なる世界」を理解するということであり、その異なる価値を異なる価値のまま自分の中に統合してゆくことである。そしてこれこそがユングや漱石の分類体系の、最後にして最大の意義なのである。この体系は「異なる世界」の存在を教えるだけでなく、その「異なる世界」を理解してゆく道をも切り開いているのだ。この体系は、様々な「異なる世界」の特徴や構造を解明してゆくものであり、その中に蔵されている無限に多様な人間群像を教えてくれるものであり、それ自体「異なる世界」への架け橋になり得るものなのである。「異なる世界」の住人たちは、この実証的に練り上げられ体系をもとにして、お互い同士の相互理解の道を開くことができるのである。そしてこの際もっとも重要なことは、自分の属している世界が何なのかを知るということである。自分の八分類のうちのどこに属しているのか、そこから世界を見るとどのように見えるのか、自分が絶対だと思っていた世界が実はどのような特徴に染められているものなのか、それを自分の人生を通じて実体験として検証し、客観的に見れるまで自己認識を深めてゆくのである。そうしてこそ初めて、他の世界の事情もありありと分るようになり、その世界の本質を“自分のものとして”理解できるようになるのだ。自己認識を深めてゆけ

ばゆくほど他の世界の認識も深まり、自己の世界を掘り下げてゆけばゆくほど他の世界への道も切り開かれてゆくのだ。ある分類に自分を類別することは、自分を限定することではなく、他の分類世界への道を開くことにも通じているのだ。人は、人生の中で様々な異なる人々と出会い、その「異なる世界」と衝突し、その衝突を乗り越えて相互理解し、人間として成長してゆく。ユングや漱石の分類体系は、「異なる世界」の間の相互理解を可能にするものであり、そしてそのような理解がもたらす「成長」の道をも内蔵している体系なのである。

だがそうはいっても、「異なる世界」を理解し、統合してゆくことは至難の道である。須永が予感したように、無理に「異なる世界」を結びつけたりしたら、相互の世界を破壊することにも成りかねないのである。この道を進んでゆくためには、理解とともにさらに大きなもの—“全体的世界”ともいべきヴィジョンが必須となる。そのような超越的ヴィジョンがあって始めて、まったく異なる世界が全体の中の個々の小世界として有機的に結びつけられるのである。

ユングや漱石の分類体系は、この“全体的世界”をも内蔵していると言うことができる。その中に蔵されている無限に多様な人間群像は個々の小世界であり、それが八分類の体系のもとに有機的に結びつけられ、全体として一つのものとなっている。個々の世界は小世界ではあるが、その小世界を深めてゆくことによって他の小世界への理解の道が開かれ、ついには全体を覆うこともできる。まさに「一即多」「多即一」の“全体的世界”となっているのである。

この“全体的世界”は、仏教的に言えば「マンダラ的世界」の構図によく似ている。そこにも無数の世界が蔵されていて、それは一つ一つの仏として形象化されており、その無数の仏が「一即多」「多即一」的に有機的に結びつくことで、ひとつの“円環”を、一つの“全体的世界”を成しているのである。（この“全体的世界”が具体的には何であるのか—「神の秩序」なのか「仏の世界」なのか「科学の法則」なのか、はたまた「人間性の完成」なのか—は基本的にはどうでもいいことである。マンダラの本質が、「作っては壊し、壊しては作る」永遠の活動であるなら、それを何かの主義で固定してしまう方が間違っているのである）

漱石は『彼岸過迄』において、「内面世界」への探求を続けて来たのであるが、それはここにおいて頂点に達する。一人の人間の「内面世界」には、ユングや漱石が築き上げた巨大な分類体系が—無限に豊かな可能性に満ち溢れ、「一即多」「多即一」の“全体的世界”という構造を成している—そっくりそのままあるのである。あるいはこの分類体系こそが「内面世界」だと言ってもいい。なるほど一人の人間はある一つの小分類に属して生きている。しかしそれは単に強弱の相違に過ぎず、その他の性格分類も弱いながらもその人間の一部として存在し

ているのである。「外向」も「内向」も、「思考」「感情」「感覚」「直観」もすべて一人の人間の中に含まれている。人は人生行路の中で、自分の性格だけでなく、その他の性格をも認識し、理解し、自分の中に統合してゆくことができる。そしてついには“全体的世界”の構築へ至ることさえできるのだ。漱石は理想的な人間像として「文芸の聖人」のことを述べているが、この「文芸の聖人」とはまさにこのことを実現した人間なのである。つまり自然主義者のように自分の狭い世界に閉じこもることなく、他の「異なる世界」をも豊かに統合してゆき、ついには自らの“全体的世界”を樹立した人間なのである。このような人間にしてはじめて、後世に輝き渡るような偉大な文芸を生み出すことができるのである。

そして『彼岸過迄』の主人公須永は、このような「聖人」になり得る資質を持った人間であると言うことができる。彼は松本が的確に述べているように「在来社会を教育する為に生れた男」なのであり、本来この“全体的世界”の樹立へと歩んで行き得る人間なのである。物語りの中では彼は、千代子の世界を統合することが出来ず、対立・葛藤・無理解の状態にとどまっている。しかし彼は決してそこに安住しているのではない。「僕は始終詩を求めてもがいているのである」という彼の切実な言葉から分るように、彼は対立する世界を欲しているのだ。松本も須永の「一大不幸」を述べたくだりで、そこから救われるたった一つの解決策を述べている。

「この不幸を転じて幸いとするには、内へ内へと向く彼の命の方向を逆にして、外へとぐるを捲き出させるより外に仕方がない。外にある物を頭へ運び込むために眼を使う代りに、頭で外にある物を眺める心持で眼を使うようにしなければならない」

要するにもっと「外向的」になれと言っているのである。「外向的」要素を自分の中に統合しろと言うのである。そしてそれは「千代子」へと向かう方向性に他ならないのだ。

しかし彼をこの“全体的世界”への道から阻んでいる大きな障害がある。それは「母親との不調和」である。

須永はるか以前から自分に「僻み」心を起こされる何かの「不調和」があることを感じ続けていた。彼の鋭敏な神経は常にそれを感じていたが、それが何であるかは分らなかった。彼の大学卒業が迫った頃、それは同時に千代子との結婚話が煮詰まってきた頃でもあったが、ついに彼は意を決して松本のもとを訪れ、年来の秘密を知ろうとする。彼は松本に激しく詰め寄り、ついにその秘密を明かさせる。それは須永にとって驚くべきことだった。彼は、彼の母の実の息子ではなかったのである。

彼は死んだ父が女中に生ませた子供なのであった。その女中は須永を生むとすぐに死んでしまったという。そのことは秘密にされ、須永は父と母の二人の子供として今まで育てられてきた。須永の母は実の子供のように大切に須永を育ててきたが、やはり須永との血縁的關係を築きたかったのだろう。彼女が千代子と須永を結婚させたがっているのはそのためであり、千代子と結婚させることによって須永を真の血縁關係の中に入れたかったのである。

このことを聞かされた須永は激しく動揺する。心の平衡が失われ、彼は気が狂いそうになり、こんなことも口走る。「...人間の頭は思ったより堅固に出来ているもんですね、実は僕自身も怖くって堪らないんですが、不思議にまだ壊れません」

なんとか無事卒業試験を済ました彼は、心の傷を癒すために旅行に出かける。それは「日本文化の母」ともいえる関西の地への旅行だった。彼はここでなんとか心の平静を回復する。関西の風土や関西の方言が彼の心を和らげ、また彼は余計な事を考えずにひたすら「見る」ことによって自分の心に平衡を与えてゆく。彼はひとまず深刻な危機を脱して、東京へと戻って来るのである。

物語りの冒頭で敬太郎が見た須永とは、この東京へ戻って来たばかりの須永なのであった。それは千代子との結婚をめぐる葛藤を経てきた須永であり、宵子の死を見つめた須永であり、母が実の母でないことを知り、気が狂うほど悩み、関西旅行で一時の癒しを得て来た須永なのである（彼は敬太郎への告白話の際、母親に関することは話さずに、とぼけていた。ただの友達である敬太郎に話すことではないので当然のことである）。彼は相変わらず物静かに家の中に引きこもって、母親と二人（その母が実の母ではないことを彼はもう知っている）静かに暮らしている。また千代子も相変わらずその家にしげしげとやって来ている。外から見たら平凡極まる光景に見えるのだが、しかしその表面の奥では、彼はこれほどのドラマや葛藤を演じてきたのであり、彼の「内面世界」ではこれほどのことが行われ、また現在も行われ続けているのである。

エピローグとして敬太郎が経験してきた「冒険」のことが回想される。色々な人々の話が総括され、また彼のやった探偵のことも思い出される。そして最後に次のように述べられる。

「要するに人世に対して彼の有する最近の知識感情は悉く鼓膜の働らきから来ている。森本に始まって松本に終る幾席かの長話は、最初広く薄く彼を動かしつつ漸々深く狭く彼を動かすに至って突如として已んだ。けれども彼は遂にその中に這入れなかつたのである。其所が彼に物足らない所で、同時に彼の仕合せな所である。彼は物足らない意味で蛇の頭を呪い、仕合せな意味で蛇の頭を祝した。そうして、大きな空を仰いで、彼の前に突如として已んだ様に見える

るこの劇が、これから先どう永久に流転して行くだろうかと考えた」

『彼岸過迄』はここで終わっている。敬太郎の役目もこれで終わり、職を得た彼はこの後一社会人として彼の人生を歩んでゆくことになるだろう。彼が表面的に経験した「内面世界」への冒険は、彼の貴重な社会体験として記憶されてゆくに違いない。だが作者である漱石はもちろんさらに進んでゆく。彼はここで確立した「内面世界」への方法論を用いて、いよいよ具体的に「内面世界」の奥底を掘り抜いてゆくのである。そしてその「内面世界」とは、漱石自身の「内面世界」に他ならない。